
とあるバカと禁書目録

暮灘雪夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるバカと禁書目録

【Nコード】

N3936Y

【作者名】

暮灘雪夜

【あらすじ】

それはとても小さな…
でも大切な…

【あいとゆづじょうのおとぎばなし】

「いっぽーはいっぽーだよ。例え記憶を失ったいてもね」

「アキヒサ、だぁ〜い好きなんだよ」

「記憶なんざア無くて、な〜んとかなるもんだぜ？」

「失いたくない…だからっ！！」

「大丈夫。そんなあきひさをわたしは応援してる。ずっと…」

この物語に英雄は出てこないかもしれません。

皆で幸せになるには、一握りの英雄より【大切な何か】がきつとある…

例えば、そんなおとぎ話…

どうも、暮灘です（^^）；

無謀にも、また執筆衝動を抑えきれず、連載を初めてしまいました（汗）

基本的に、

明久単独 禁書目録世界

というコンセプトの作品です。

だから、当初はバカテス板に連載していましたが、バカテス板に引

っ越して参りましたm() () m

1〜3話までは前に【吉井明久を様々な世界の色々なヒロインと絡ませてみた】に掲載した物を大幅に加筆修正した物を、4話以降から未発表エピソードとなります。

このようなコンセプトの作品で不定期連載になると思いますが、皆様に楽しんで頂ければ幸いですm() () m

第1話 "バカといっぱーと禁書目録"; (前書き)

皆様、おはようございまーす

暮灘の作品コンセプト集

【吉井明久を様々な世界の色々なヒロインと絡ませてみた】

からスピオフさせて、ついに連載を初めてしまいました(^^;
まずは、原作で言う【禁書目録編】をゴールに定めて書いていきたくないあ〜と。

既に上記の”明久色々”で掲載していた第1話を表現の甘い部分を中心に加筆修正したのがこの第1話です。

4

内容は次回予告風に書くと…

学園都市で比較的平和(?)な時間を過ごしていた吉井明久
しかし…

「えっと…僕、シスターさんなんか干してたっけ?」

一つの出会いが、彼の日常を変えてゆく…

そして、

「明久クウウン」

間近に聞こえる”第一位”の声！

今回、【バカといっぱーと禁書目録】

科学と魔法が融合した街で、物語はゆっくりと幕開ける！

こんな感じのエピソードですが楽しんで頂ければ幸いです) o ^ .
,) b

第1話 " バカといっぱーと禁書目録";

皆さんは、【学園都市】って知ってるかな？

えーと、僕が住んでる街ことなんだけどね

えっ？

知ってる？

じゃあ、この街が出来た由来や経緯はどうかな？

へえ…

みんなが知ってる【学園都市】ってかなり物騒なんだね？

”お前の世界”は違うのかって？

うん。大分、違う…と思う。

そもそも、僕の住んでる【学園都市】が設立された目的は、

《最先端の科学と古代からの英知である魔法の積極的な融合を研究
すること》

なんだ。

そして、僕が生まれる何年前：【学園都市】は、その”最初の存フェア在意義”を示す事に成功した。

”シェリー・クロムウェル”

”エリス・マツカートニー”

多分、【学園都市】でこの二人の名前を知らない人はいない。

僕が生まれる何年前になるから…20年くらい前かな？

【学園都市】で行われた実験で、シェリーさんは【始めて超能力を使った魔術師】になったし、エリスさんは【始めて魔術を使った能力者】になったんだ。

ある意味、それまで良くて色物、悪くて異端扱いだった学園都市の真価が世間に認知され始めたのは、それからだったのかもしれないね。

えっ？ 二人とも生きてるのかって？

…質問の意図がよく分からないけど、今も二人とも学園都市で【魔法と能力の近似性と相違】って感じの研究を、揃って大学教授になった今でも続けてるよ？

僕もシェリー先生やエリス先生主催のセミナーや講演会によく行く

し、しっかり大学のオープン・キャンパスのゼミに登録してるしね
っ

なんでって？

うん…細かく言うと長くなるから、簡単にはしよるけど、僕の両腕に宿る”力”…

【ゼロ・スコア零点回帰】

って言うんだけど…

この力が、まだ能力なのか魔術的なのかハッキリしないんだよ。

こういうケースってごく希あるらしくて、隣の部屋に歳上の彼女と一緒に住んでる当麻…

彼女とラヴラヴ同棲中の上条当麻の右手に宿る【幻想殺し（イメージン・ブレイカー）】も似たような区分らしいからなあ。

（僕のゼロ・スコアと当麻のイメージン・ブレイカーって性質も似てるしね…）

ただ、専門家に言わせると似ていて非なる物…効果が似てるだけで、原理は全く別らしい。

（当麻は文字通り”異能力破壊”で、僕は”ホメロスタシス”に近い性質かあ…）

まあ、それはそのうち詳しくね？

某年7月20日

全ての始まりの日…

act-1

” 腹ペコシスターがやって来た！！”

僕は今のところ魔術でも能力でもない【力】を除けば、かなり普通
な人間だと思う。

ああ、そう言えば自己紹介がまだだったっけ？

僕は【吉井明久】。

とある高校に通う一年生だよ

能力は前に書いたけど、未分類の【ゼロ・スコア零点回帰】。レベルは、当然のように「Unknown」。

そりゃあ、魔術でもない能力にも該当しない力…

”物差し”が作れない以上、レベルが不明なのはしょうがないよね？

友達は変わり者が多いし、魔術でも能力でもない力のせいで色々な所から呼び出されるけど、でもそれ以外は特に幸福でも不幸でもない…と思う。

だから、”不測の事態”って、それほど経験が多い訳じゃないんだよ。

だから、ある晴れた休日、お布団を干そうとベランダに出たら、何故かもう布団が干されてて、その布団をよく見たら…

「え〜と…僕、シスターさんなんか干してたっけ…？」

ベランダに干されていた…それとも、引っかかっている？のは、何となくウエツジウッドとかの白磁の”ティーカップに似た印象”の真っ白の修道服を着たちみっこいシスターさんで、

「お腹へった…」

なんて、白くてちみっこいシスターさんにベランダから眩かれる経験は、生まれて初めてでありましたとさ…

というか…

(普通は無いよね?)

「お腹減ったって言うてるんだよ?」

何故か疑問形のその可愛いシスターさんに僕は、

「それは僕に『何か喰わせる』と要求してるって解釈していいのかな?」

「うん 理解が早くて助かるんだよ」

…

…

…

…

…まあ、いつか。

(急な来客には慣れてるしねえ)

まあ…こんな珍妙な来訪は、初めてだけぞ。

「手っ取り早く食べれる物と、美味しく食べれる物、どっちがいい？」

するとちみっこいシスターは本当に満面の笑顔で、

「手っ取り早く食べて、尚且つ美味しい物がいい!」

寧ろ清々しくなるくらいキツパリと言い切りましたとさ。

「うん…なるべくリクエストには答えられるように努力はするよ。でも、その前に…」

僕はシスターさんの両方の脇の下に手を入れて…

”ふわっ”

(うわぁ…軽い)

「にやにやにや!?!」

僕に抱き上げられたせいなのか、シスターさんは顔を真っ赤にして猫みたいなき声を上げるけど、

「ベランダにぶら下がったまんまじゃ、ご飯は食べられないでしょ？ 可愛いシスターさん」

「はう…」

あれ？ 何だか大人しくなっちゃった。

運びやすいから良いけどね

act - 2

” 禁書目録にDedicatus…かあ ”

「シスターさん、炒飯と焼きそばどっちがいい？ って言うか炒飯と焼きそばって料理、わかる？」

すると借りてきた猫みたいに座布団にチョココンと座るちみっこいシスターさんは、

「どっちもわかるよ　それに両方！」

「炭水化物と炭水化物の夢のコラボレーションになっちゃうけど？」

「そのコラボ、むしろ上等なんだよ　えっと、それと私の事は【インデックス】って呼んで欲しいんだよ」

（”インデックス”：コードネームか何かかな？）

僕は中華鍋にゴマ油を流して、ある程度暖まった所に溶き卵を入れながら…

「それって、索引ちゃんとか、見出しちゃんって意味かな？」

「ううん。【禁書目録】って意味なんだけど…あつ、魔法名は【D
educatus545】、”献身的な子羊は強者の知識を守る”
って意味だね」

えっ？

それって…

「【禁書目録】って、もしかして【Index Librorum
Prohibitorum】のこと？ 1564年にローマ十字
正教の教皇によって制定されて、1966年に廃止されるまで存在
していたっていう【反十字教書物のブラックリスト】って感じの…
？」

すると、シスター改め”インデックス”は少し驚いた顔で、

「君、随分詳しいんだねえ…」

僕は【自分の力の”根源”】が知りたくて、能力関係と一緒に魔術
関係の本とか読み漁ってるから…歴史とかラテン語とかは、その流
れで詳しくなっただよ。

まあ、そつちに時間を取られてるせいで普通の勉強はからっきし、まさに【バカまっしぐら】だけどね（笑）

それはともかく、

「それで、”Dedicatus”って…僕のラテン語知識が確かなら、【神に完全に捧げる事を宣言する】って意味になるんじゃないかな？」

「君、ラテン語までわかるの？ 若く見えるけど、君は学者さんかなのかな？」

「ラテン語は、かじった程度だけど。あつ、僕は明久。吉井明久。学者どころか、どちらかと言えばデキの悪い部類の学生だよ」

シエリー先生やエリス先生曰く、魔法や魔術を理解するには、

【過去へ過去へと遡り、それが成立した経緯や根源】

まで理解しないと本当の意味では理解できない…らしいから、僕もそうしてるとて訳。

シエリー先生に言わせれば、

『科学は未来へ未来へ進む学問だけどね、魔法や魔術は時間の積み重ねで成立する。時間のベクトルが真逆なんだよ』

って事らしい。

まあ、そういうシエリー先生も、ルーンの解析にコンピュータ使ったり、ゴーレム錬成の術式を刻むのにチヨークだけじゃなくてハンディ・レーザー使ったりするけどね

「アキヒサ…アキヒサだね」

なんか嬉しそうなインデックスだけど、

「ところで、インデックス…一つ聞いていい？」

「うん　アキヒサは命の恩人だもん！　わたしに答えられる事なら、なんだって答えるよ？」

「じゃあ…」魔法名”を名乗ったって事は、ご飯を作らせた後、僕をサクツって殺っちゃうつもりなのかな？って…」

(確か、魔法名ってそういう用法じゃなかったっけ？)

でも、僕の言葉にインデックスはいかにも心外って顔で、

「そんなことしないもんっ！！」

act - 3

” 友達がコーヒー豆と一緒にやって来た”

「アキヒサ、天才なんだよっ!! スツゴくスツゴく美味しいんだよっ!! ここまで美味しいと、きつとお腹好いて無くても美味しいって思っただよっ!!」

「そ、そっかな? そこまで喜んで貰えると、照れ臭いけど嬉しいよ」

あゝもう、口の回りソースだらけじゃん。

「喋りながら食べるから…インデックス、こっち向いて」

僕はティッシュを手にとってインデックスの口の回りを拭いてみる。

「はい。これでよっつと」

するとインデックスは、ちよっぴり頬を赤くして、

「ねえ…アキヒサってもしかして、凄く”世話好きな人”…なのかな?」

「かもね。周囲に何かとほっとけない人が多かったし、今も多いから」

色々と思い出して、僕は思わず苦笑してしまう。

それは、インデックスの皿上の残量が少ない事を確認した僕が、ちよつど立ち上がるうとした時だ。

”あつきひさくウウウー”

「な、何つ、今の不気味な声っ!？」
”祝歌”マクンバ 何か!？」

「ああ、友達が来たみたい。うん、今のは【音を媒介する空気振動】を”ベクトル操作”した音なんだ。簡単に言えば、指向性スピーカーみたいなものだよ」

チンパンカンパンな顔をするインデックスに、僕は「ちょっと待ってて」と言い残し、席を立って玄関に向かう。

そして、ガチャとドアを開けると、立っていた無造作に切り揃えた長めの白髪頭で、ヒョロつとした印象の”友達”に、

「やっほ、”いっぽー”。今日はどうしたの？」

「コーヒー煎れてくれ」

と、”いっぽー”…通称【一方通行】アフセラレーターは、玄関に入るなり、僕にビール袋に入った紙袋を手渡す。
開けて見ると、

「コーヒー豆？ 店で挽いてもらわなかったの？」

「店で挽かせたら、持っていくまでに薫りが飛ぶだろオが。それに明久が挽いた方が美味エンだよ」

いっぽーのコーヒーへの拘りは半端じゃないからなあ。

「ん、わかったよ なら、いっぽーの期待に応えないとね。あつ、いつまでも玄関に居ないで上がりなよ？ あつ、お客さん来てるけど、同席でいい？」

いっぽー…強面^{つても}だけど、意外と人見知りだからなあ。
一応、断っておかないと。

「客だア？ 俺の知ってる奴かア？」

僕は首を左右に振り、

「多分、誰も知らないと思う。多分、英国清教系のちみつこいシスターで、ベランダに引っ掛かった」

「アアン？」

いっばーは思い切り怪訝な顔をするけど、事実だしなあ…

僕といっばーは家に入りながら、

「あれ？ そういえば、”あいちゃん”に”うみちゃん”は？
—
緒じゃないの？」

「ああ。最愛と海鳥は”バイト”だ」

「バイト？ ああ、【アイテム】かあ。沈利さんのところなら、まあ大丈夫かな？ 最近は危ない橋を渡ってないって噂だし」

沈利さんって言うのは、フルネームを【まきのしんり麦野沈利】さんって言って、特殊能力者部隊【アイテム】のリーダーさん。

熊もびつくりなぐらい鮭料理が大好きで、最近はゴッツい彼氏ができたらしいって噂があるんだよね〜

アイテムには僕の友達も所属してるから…

（この間、差し入れに鮭弁を作って持っていったら、大喜びされたっけ）

…おかげで、危うく【アイテム専属料理人】にされかけたけど。

「…ンで、妹どもと合流するまでの時間潰しに来たんだがヨォ…タイミング悪かったか？」

「ううん。いっぽーならいつでも大歓迎だよ」

「…明久のそばにやたら人が集まるワケ、解る気がするぜ…」

いっぽーは何か呟いたみたいだけど、音声を拡散させたのか僕にはよく聞こえ無かったよ。

第1話 "バカといっぱーと禁書目録"; (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございますm(____)m

もう、正規連載三本という暮灘の無茶苦茶な無軌道さを、きっと皆様は呆れ苦笑してるだろうな〜と思ってる暮灘です(^^);

”明久色々”で既に読まれてる方も多いと思いますが…皆様、如何だったでしょうか？(汗)

実際、この物語は禁書目録のストーリーをなぞりながら、明久を主人公に据えて、よりハッピーな方向に原作を再構築しようというコンセプトの物語です。

多分…

【当麻が主人公じゃないと許せない】

【当麻が不幸じゃないと許せない】

【というか、明久が主人公じゃなくても…】

という読者の皆様にはとことん合わない物語になってしまつと思ひます(;^_^A

それでも構わないという読者の皆様、これからますます鼻唄くだると
作者として、とても嬉しく思います(――)

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ(o^_^)(b

第2話 " バカと友情と記憶喪失"; (前書き)

皆様、こんにちはー

実は加筆修正というのは、思ったよりも手間がかかると改めて感じる暮灘です(^^;;

さてさて、今回のエピソードは…

「それよりも煎れたての一切薫りが飛んでねエ、香ばしいコーヒーが飲みてエンだ」

わりと子供っぽい部分がある一方通行。

「ほらね？ やっぱー、いっぽーはいっぽーじゃない」

明久の無垢な笑みが意味する物は？

「ありがとうだよ いっぽー」

「らしくねエ…」

それは、原作という平行世界では有り得ない一方通行の心の動き…

今回、【バカと友情と記憶喪失】

科学と魔法の融合する街の姿が、今明らかになる！

こんな感じのエピソードですが楽しんで頂ければ幸いです(〇>・
)b

第2話 " バカと友情と記憶喪失";

とある学生寮として使われてるマンション

明久の家、キッチン

「ねえ、いっぱー…」

何かいいお茶菓子ないかな？という感じで台所を漁っていた明久の問いかけに、

「アアン？」

「インデックスと一緒にリビングで待ってたら？」

するといっぱーこと、アクセラレーター一方通行は苦虫を噛み潰したような顔で、

「明久クウウン…この俺に、あの時代錯誤臭満点のミニサイズのシスターと、何話せてんだア？」

「英国十字清教の歴史概論とかは？ ローマ十字正教からの政治的独立を画策した【宗教改革という名前の独立戦争】のくだりとか面白いよ？ 後のアメリカ独立戦争の時の近似点とかね」

「興味ねエ…それよりも煎れたての一切薫りが飛んでねエ、香ばしいコーヒーが飲んでエンだ」

明久は苦笑しながら、

「はいはい。もうすぐ抽出し終わるから、もうすぐ待ってね」

「オウ…」

と、何気に横目で煎れたてのコーヒーがあがるのを今か今かとサイフォンをガン見してる、存外に子供っぽい一面を見せる一方通行であった。

「お茶受けは、買い置きのコッキーしか無いけど良い？」

二人分の紅茶とクッキーを入れた菓子皿を持ってリビングに戻ってきた明久がそう言うと、

「うんっ！ アキヒサ、何から何までありがとうなんだよ」

「別にいいよ」。客人をもてなすのは、古式豊かしい日本の風習と美徳だし」

「だが、オメエは度が過ぎんぜ？ 一歩間違うと、襲撃してきたス

キルアウトまで茶と菓子出して持て成しそうだからなア」

と、呆れるような表情でリビングへ入って来るのは、すっかり本日二杯目の”明久コーヒー（笑）”を、なみなみと大きめのマグカップ（明久の家に置きっぱなしの私物）に注いでキープしてる一方通行だった。

「それでもいいじゃない？ お茶とお菓子で殺し合いが話し合いに変わるなら、僕は喜んでいくらでも用意するよ」

しかし、一方通行は面白くなさそうに、

「ケツ！ 明久、オメエは連中は甘過ぎるぜ？ 情けてんのは、常に正しい結果になるとは限らねェんだぞ」

「わかってるよ。見逃したが為に、逃した相手に後ろから頭を撃ち抜かれる事もある…それが、【学園都市】の掟だし、宿命だからね…」

明久は小さく笑い、

「いっぱい、心配ありがとう」

「チツ…」

「でも、これも性分だからさ」

少しだけ、【この世界の学園都市】の話を見せて欲しい。

”とある平行世界”では、

【スキルアウト＝レベル0】

が常識だったが、この世界の学園都市は、そうとも限らない。

前にも触れたが、学園都市の存在意義は、

【最先端科学と伝統ある魔術の有機的融合】

それを看板に掲げてる街が、”能力者じゃない”という理由で、あらゆる機関や組織が人を放り出す訳は無かった。

レベル0はあくまで【能力者基準】の話で、今の学園都市の技術なら、本格的な能力開発（脳の外科的処置による構造変更）の前に、いくらでも判定ができる。

魔術師の素質というのは能力者よりかなりアナログ的で、資質があるかどうかは本当に修行をやってみないとわからない部分が多々ある。

そして現実にレベル0と判定された人間が、後に魔術師として大成したというケースは、プロパガンダではなく学園都市には純然たる【事実】として山積している。

考えてもみて欲しいのだが、原作と呼ばれる”とある平行世界の彼女”に言わせれば…

『魔術っていうのはね、才能の無い人間（無能力者）が、それでも才能のある人間（能力者）と同じ事がしたいからって生み出された物なんだよ』

であるならば、【無能力者】とは判定された人間が無能と呼ばれたいが為に魔術にすぎるのは、当然の帰結であった。

更に学園都市では【最初の超能力を使った魔術師】であるシェリー・クロムウェルや、【最初の魔術を使った能力者】であるエリス・マツカートニーの成功を受け、コンピュータを中核に据えた最新機材を積極的かつ大量に導入し、更に多角的&高速に大量の情報を元に魔術を解析し、数多くの成果を上げたし、今も上げている。

でも、皆様は不思議に思わないだろうか？

とある平行世界において能力者と魔術師が互いの力を使えない理由は、脳の構造的な違いをあげ、

【直流回路に交流の電気を流す、あるいは交流の回路に直流の電気を流すような物】

と表現されていたが、これの意味は…

【電気（異能の力）と言う本質は同じだが、交流と直流のように能力と魔術には性質の違いがあり、それぞれに対応した（脳内）回路でないと焼き切れてしまう】

という比喻だ。

しかし、我々は日常的に変換回路を用いて交流と直流を切り替えて使っている。

ならば…

学園都市の一番偉い人

『ならば、我々も魔術と能力の間の脳内信号処理を切り換える…そのような交換器を開発すれば良いだけの話。アナログ信号とデジタル信号の相互変換すら可能なご時世だ。やってやれない事はあるまい？』

必要悪の教会の偉い人

『中々グッドアイデアにありにけりですことよ』

と、このような話し合いが持たれ、シエリーとエリスの成功をもつて一つの”マイル・ストーン（第一の成功）”となしたのだ。

このような経緯から今や学園都市は、能力者だけでなく、

【世界で一番魔術の研究を大っぴらに行い、また魔術師の強さや希少性を考慮しなければ、世界有数の魔術師が多く住んでる街】

という側面も持つ。

【学園都市】は、名前負けしないよう研究と教育には熱心な街で、魔術の研究と教育、魔術師の育成もまた例外ではなかった。

科学サイドから無能力者（レベル0）と判定された人間の受け皿となる【魔術】。

では、そこから落ちぶれた人間の行き先は？

実は、社会的セフティ・ネットは学園都市にはもう一枚存在する。

それ即ち【信仰】：平たく言えば、【英国十字清教】だ。

建前的には、魔術関連の技術やパテントは全て英国十字清教：実質的には【必要悪の教会】^{ネセサリーズ}が掌握&管理していて、そうであるが故、形の上だけでも主流の英国式近代魔術師を志す者は、十字清教に改宗or入信しなければならない。

そして、魔術師になりきれなかった者の中には、信仰に救済を見出す者も多く、その中から聖職者を目指す者も数多くいる。

実を言えば学園都市というのは、極東で英国十字清教徒がもつとも密集してる街で、同時に英国十字清教のアジア最大の拠点でもあった。

これが後に英国十字清教保守派：魔法と科学の融合に反対する一派（彼らの妨害が懸念された事が、シェリーやエリスの実験が学園都市で行われた理由の一つ）が、迂濶に学園都市を攻撃できない理由であり、同時に後々ローマ十字正教が執拗に狙ってくる理由の一つでもあるのだが…

ある意味、張本人のシェリー・クロムウェルに言わせれば、

『いつの世にも、変革を受け入れたがらない者はいるさ。特に保守的な事が美德とされてきた魔術師なら、尚更さね』

話を戻すが…能力、魔術、信仰という受け皿を越えてなお【無法者】
となる者が、果たしてどれ程いるのか？という事だ。
スキルアウト

例えば…であるが、もし仮に能力者の一部が【無能力者狩り】等と
いう愚かなゲームを始めれば、被害者はまず十字清教系の施設に駆
け込むだろうし、さすれば魔術師が裏に表に即座に動くだろう。

【この世界の学園都市】とは、そういう力学バランスで成り立って
いた。

「ねえねえ、アキヒサ　そのプラチナ・ブロンドの人ってアキヒ
サのお友達？」

クッキーを頬張りながら、幸せそうな顔で聞くインデックスに明久
は頷き、

「うん。そつだよインデックス。行方一方。なめかた・いっほう僕の幼馴染みで親友だ
よ」

すると一方通行は、少し視線を逸らし…

「よせよ…俺は、もう戸籍も無けりや、オマエの言うその名もどこにも残ってねエよ…過去の記憶も曖昧だ」

「でも、いっばーはいっばーだよ。例え、記憶が有ろうと無かろうと、ね？」

無垢に微笑む明久に、

「毎度思うんだがよオ…明久、なんでオメエはそう自信満々にあっさり言い切れるんだア？」

「だっていっばー、再会した時、ちゃんと僕のこと憶えてたじゃない？」

「ありや…どっかで見たとあるツラだって思ったただけだ」

明久はクスツと笑い。

「それで十分だよ　それって、ココでは忘れても…」

明久は自分のコメカミをトントンと人差し指で叩いた後、今度を自分の胸を親指で指して、

「ココではしっかり憶えてたって事でしょ？」

一方通行は、白髪をクシャと掻き（一方通行の照れた時の仕草だ）、

「バカが…」

と、小さく呟いた。

「やっぱり、いっぱいはいっぱいだよ　僕をバカって言う時の口調、昔とちっとも変わってないもん。昔からいっぱいには沢山バカって言われてたから、よく憶えてるよ」

「それはオメエがあんましお人好しで無茶で無鉄砲だからヨオ…ア
ン？」

一瞬…ほんの刹那の間、朧気な画像が脳裏を掠めた…
明久と再会してからたまに起こるようになった…理論的には有り得ない現象に、一方通行は慣れ初めてはいても軽い驚きを覚えた。

そして明久は優しく微笑み、もう一度…

「ほらね？　やっぱり、いっぱいはいっぱいじゃない」

「いいなあ…」

そんな二人を見て、インデックスは心から羨ましそうに呟いた。

「記憶が無くなっても、そうやって大切に想ってくれる友達がいる…記憶を無くしても、大切に想いたい友達がいる…」

今にも泣きそうな顔で微笑むインデックスに、

「インデックス…その言い方でもしかして、君も…?」

インデックスは小さく頷き、

「うん。私も一年より前の記憶が無いんだよ」

しかし、場が暖かい友情からシリアスな空気になろうとした時、

”キンコーン”

いきなり、タイミングを計ったようなチャイムの音。

「誰だろ?」

明久は良い意味で空気を読まず立ち上がった。
そして、インターフォンをとると、

『あつ、アキ！ 今、大丈夫？』

モニター画面に映ったのは、茶髪をショートカットにし、花のついたヘアピンがワンポイントの中々可愛らしく、同時に活発そうな少女だった。

「あつ、”ミコちゃん”」

明久はチラリと一方通行とインデックスを見る。
一方通行はさして興味も無さそうに「いーんじゃね？」って顔をしてるし、インデックスはコクコクと頷いていた。

「うん、オツケーだよ」

明久が玄関に向かっていくのを目で追ってから一方通行は、

「なア、シスター……」

「なあに？」

「記憶なんざ無くても、わりと人間どうとでもなるし、生きてはい
けんぜ」

「…うん」

「それでも足りねェンなら、新しく記憶すりゃいいだけだ。俺から言えんのは、それぐれェだ」

インデックスは意外そうな顔をしてから満面の微笑みで、

「ありがとうだよ ” いっぱい ”」

「チツ…」

(俺もヤキが回っちまっか…)

あるいは、

(それとも、明久のバカでも感染したか?)

何れにせよ…

「まア…悪イ気分じゃねェな」

【原作】と呼ばれる平行世界を基準にするならば、それは驚くべき変化に違いない。

だが、これがかつて行方一方と呼ばれた少年の……”今の一方通行”
の偽らざる姿だった。

吉井明久という少年が”存在する影響”は、実は誰もが思うよりも
大きいのかもしれぬ……

第2話 "バカと友情と記憶喪失"; (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(_____)m

ほぼ連続投稿となる第2話は如何だったでしょうか？

実はかなり加筆修正されてるので間違い探し感覚で読むと面白いかもです(笑)

今回は明久と一方通行の友情と【この世界の学園都市】をテーマにしてみました(^^;;

出来れば、今日中に第3話をアップしたいのですが、”美琴デレ回(笑)”の異名をもつあのエピソードは、大幅に書き直しが必要なんだよなあ〜と(;^_^A

取り敢えず頑張ってみますので、皆様またよろしくお願いします

それではまた次回お会いできる事を祈りつつ(o^_^)b

第3話 "バカと電撃と両力使い"; (前書き)

皆様、こんにちはー

本日、三度目のお邪魔しますな暮灘です(^^);

大幅な加筆修正が終わったので、早速第3話をアップします

暮灘の辞書に”出し惜しみ”という言葉はありません(笑)

今回の第3話は、大幅に書き直してる上に、文章量が20%以上増えてます(^^);

更に明久の【ゼロ・スコア零点復帰】の簡単な能力解説や明久のバイト先の一つ(笑)が明らかになったりします。

そして、美琴のデレ度が更にアップしてたりして(; ^ | ^ A

では、また次回予告風に…

「アキにも…食べてもらいたくなって…」

デレるビリビリ!

お前に何があった!?

「勝った…コホン。そんな”ちっぱい”をわたしは応援しなくもない」

いきなりビリビリにケンカ売る謎の少女！

お前は、命がいらなのかつ！？

年下の友人の応援を背にする時、御坂美琴は覚悟を決める！

今回、【バカと電撃と両力使い】

科学と魔法の二つの力が融合する時、平行世界では有り得ない存在が生まれる…

こんな感じのエピソードですが、お楽しみ頂ければ幸いです（o^

・（b

第3話 " バカと電撃と両力使い";

明久が玄関を開けると、そこに立っていたのは…

「こんにちは、”ミコちゃん” 今日はどうしたの？」

歳の頃は10代半ばぐらいだろうか？

天下の名門お嬢様学校、【常磐台】の夏服を着こなし、茶色の髪を清潔感溢れるシヨートに纏め、違う学校の後輩に貰った花飾りのついたヘアピンがワンポイントを演出するという、中々に可愛い少女だった。

「あ、アキ！ あ、あの…これっ！」

顔を赤らめながら差し出したのは、さほど大きくない、でも高級感漂うお洒落なデザインの紙箱だった。

中から微かに甘い匂いのするそれは…

「あ、あのね！ さ、最近、日本じゃ【学舎の園】にしか出店していない海外の有名なスイーツ・シヨップができたのっ！ と、友達と一緒に食べに行ったんだけど、思ったより美味しくて…その、」

シヨートヘアの少女は更に顔を真っ赤にして、

「アキにも食べさせてあげたいなって…」

「そっか」

明久はスツと手を伸ばして、

「ミコちゃん、わざわざありがとうね」

”サラサラ”

見た目より柔らかい髪を乱さないように、優しく優しく撫でた。

「ふにゃあ」

明久のどこか女の子を思わせる柔和な笑顔と暖かい体温が伝わってくる手の平の気持ち良さに、少女は腰から碎けてその場に座り込みそうになる…

（だ、ダメ！ 今崩れたら、ケーキがグシャツってなっちゃっ！）

しかし、自らの”能力”を使い、生体電流を調整して筋肉に渴を入れて姿勢維持に成功！

無事にケーキを死守したショートヘアーの少女は、むしろ賞賛してもいい。

「あのさ…アキ、上がっていいかな？」

明久はニコリと微笑み、

「もつちろんだよ　お客さん来てるから、ミコちゃんが良ければ
だけど」

「　お客さん”…?」

”　びくっ”

その途端に、少女の気配が変わる…
ただし、明久は気付いてないが（笑）

「　…是非とも上がらせて貰うわね？」

引き吊りを抑えて無理矢理の笑顔だから、何やら表情に変な凄みがあるが、明久は大して気にした様子もなく、

「うん。じゃあ、先にリビングに行つててくれる？　せっかくミコちゃんグーキ持ってきてくれたんだし、お茶のお代わり持つてくから」

「うん。よろしくネ」

ニコ(?) side -

(今度は、一体どんな女が来てるのよ…!?)

既に来慣れた(ここ重要よ!)リビングに向かいながら、私はまだ見ぬ”恋敵”^{てき}の事を考えていた。

(この間は確か、オカツパ頭のピンク・ジャージだったわね…)

そう…この間、明久の部屋で鉢合わせたのは、下半身はジャージだったけど上半身は半裸(というかブラ一枚よ!)で、そのブラすら今にも外そうとしてた私より少し歳上な感じの、

(黒髪でオカツパ頭の女…アキは”ニコちゃん”って呼んでたっけ…)

とにかく、そんなのと鉢合わせしたのよっ!

アキが女の子を性的な意味で食べ散らかすタイプじゃないのは、百も承知してるから…

(だったら、私がまだ処女とか有り得ないしっ! アキと一番親しい女の子って絶対に私だもんっ!!)

あれ？

今、『そう思ってる女の子は、お前一人じゃなかりけり』って声が聞こえたような気がするけど、気のせいよね？

と、ともかくアキに話を聞いたら、そのリコって女は、能力を極限まで高めて使用する際、【残量能力中毒を起こす特殊な結晶】を服用しなくちゃいけないらしいの。

それで、定期的にアキの【ゼロ・スコア零点回帰】で、体内の【ポイズン・パウエ残留毒性微細結晶】を”浄解”する必要があるんだって。

しかも腹立たしい事に、その治療行為はアキがよくバイトで行ってる【リアル・ゲコ太（あつ、お医者さんよ？ 一応…）】のお墨付きらしいのよ！

（自分の患者をホイホイとアキに丸投げしないでよねっ！！）

あつ、アキの特殊な力、

【ゼロ・スコア零点回帰】

つて、何気にとんでもなく凄いのよ！
理屈はよくわかってないらしいけど、

【魔術だろうが能力だろうが、異能の力なら触れた物を何でも”無効化”する力】

なのよ
能力的な解釈なら、

【物理事象に干渉する変数（異能力）、その変数値を0にして干渉を0に戻す】

って事になるから、【ゼロ・スコア零点回帰】って便宜上、そう名付けられたんだって。

魔術的な解釈だと…

【自然界のホメロスタシス（恒常復元力）を凝縮して両腕に宿してる】

なんてスケールの大きな話になるらしいわ。

（それはさておいて…）

アキの説明に一切の嘘の匂いや疑わしいところはなかった（当たり前よね？ アキなんだから）んだけど…

『ねえ…ブラ、外す必要あるの？』

アキがお茶を煎れに行った隙に、私が”女の直感”で訊ねてみると…

『あきひさが望むなら、わたしは貴女が見てる前でぱんつを脱いで
も構わないけど?』

と、いけしゃあしゃあとオカッパは言い切りやがったのよっ!!

その瞬間、私は確信したわっ!!

(ああ、コイツは”恋敵”^{きて}だつてねっ!!)

更に加えて…

私の胸を見ながら、言つに事欠いて…

『勝つた…コホン。そんな”ちっぱい”を、わたしは応援しなく
もない』

ですつてえ〜っ!!

もし、アキがお茶を持ってくるのがあと少し遅ければ、私はあの時
に、取っ組み合いのケンカになつてたかもしれないわ

(しかも帰り際にアイツう〜っ!!)

『あなたの顔、覚えたから…』

『わたしもあなたの”AIM拡散力場”は記憶した』

(アレって、宣戦布告って受け取って良いわよねっ!?)

というか、それ以外の受け取りかたって出来ないわよっ！

えっ？

ところで、お前は何者かって？

あっ、そっいえばまだ自己紹介してなかったっけ？

私は”美琴”^{みこと}。
”御坂美琴”^{みさか・みこと}。

よろしくね

一応、学園都市に7人しかいない【レベル5の能力者】って事になってるわ。

能力は【電撃使い（エレクトロン・マスター）】で、二つ名は”超^レルガン

電磁砲”よ

（まあ、私としては【ちょびっただけ魔術が使える”電撃系魔法少女”】って方が気に入ってるけどね）

なんか、金髪ツインテの某魔女っ娘みたいでしょ？

あっ、そうそう！

シエリー・クロムウエルやエリス・マツカートニーが先鞭を付けたみたいに、今時の能力者は、魔術が使える者もかなりの数がいるのよ？

”魔法が使える能力者”、もしくは”能力が使える魔術師”…通称【バイア（両力使い）】って呼ばれてるわね？

私も一応は、その【バイア】なのよ

あっ、人間の脳の処理能力は限度があるから、使える魔法はたった一つだけだけどね。

まあ、簡単に言っちゃうと…
高レベル能力者って、脳が無意識に演算力を”能力処理と制御”に割り振っちゃうから、そんなに複雑な魔術や大量／大規模な魔術は使えないの。

逆に言えば、能力者レベルが低い人の方が、魔術師としての”延びしろ”は大きいって意味になるわね？

実際、私の年下の友達に能力者レベルは0だけど、スッゴい魔術を使う娘いるしネ

ちなみに、【バイア】として最もバランスがいいのは、”レベル3ぐらいの能力者”とされてるわ。

能力と魔術が両方ともそこそこ使えて…
模擬戦とかで戦ったりしても、能力と魔術が互いの欠点を補ったりしてて、人によってはかなり強いわよ？

話がズレちゃったわね？
でも、他に話す事って…

あっ！

一番大事な事を言うのを忘れてたっ！！

私こと御坂美琴は…（あれ？ どうかで聞いたことあるフレーズね？）

アキこと吉井明久に熱愛してるのですっ！！

ちよっ!?

なんでそこで全力全開でズッコケるのよっ!?

えっ?

平行世界のお前は、そんなんじゃないだろう?

私じゃない私の事なんて知らないわよ。

好きな相手に素直になれなくて、ツンデレな態度をとってる?

冗談じゃないわよっ!

アキはタダでさえ、

【鈍感と書いて”バカ”と読む】

タイプな上に、素直で純粹で無垢で、とんでもなく優しく可愛いのよっ!?!?

ツンデレなんかしょう物なら、一発で…

『僕は、ミコちゃんに嫌われちゃったのかな…?』

っと思うに決まってるじゃない!

そんな風になったら、ここぞとばかりに横から、慰めるふりした誰かに掠め盗られるわよ!

間違いなくねっ!!

(佐天さん、初春さん…私、頑張るからっ！)

私に好きな人がいることを知って、全面協力してくれる年下の友人二人の顔を、私は思い浮かべた…

『短パンは駄目ですよ。色気無さすぎですし、蹴り技使う時にパンツ見られたくないから…なんて理由がバレたら、普通にドン引きされます』

『でも、私…下着とか子供っぽいとか黒子に言われてるし…』

『それがいいんですよ！！ 普段は凛々しくてお姉様気質の御坂さんが、実は子供っぽい物が大好きって言うのは、男の人にとって

は激しく萌え要素なんですっ!!！」

『そ、そうなんだ……』

『そして、思いつきり！ 御坂さんが思い出すと赤面して恥ずかしさのあまり転げ回るくらい思いつきり甘えまくるんですっ!!！」

『ほえっ!?!』

『可愛い物好きに子供っぽい下着、そして激しく甘えん坊……これにギャップ萌えしない男はいませんっ!!！」

『そ、そうなのかな……？ でも、私……散々ケンカ売っちゃったし……そんな私が甘えても……それに私、本当に甘えん坊だし……』

『御坂さん御坂さん。きっと大丈夫です 御坂さんの売ったケンカを残らず買ってくれて、気の済むまで付き合ってくれるようなおバカな……バカみたいに包容力がある男の子なら、きっとどんなに御坂さんが甘えても受け入れてくれる筈ですよ』

『初春さん……』

『これ、差し上げますね』

『これって……お花のついたヘアピン……?』

『わたしが昔使ってたお古ですけど、きっと御坂さんの可愛さをアピールするのに役立ってくれる筈です』

『グスツ……二人ともありがとう……っ!!！」

『いいんですよ！ 乙女にとって恋バナは重要な栄養素ですから』

『白井さんの事はお任せください。いざとなったらわたしの分まで山ほど仕事を回して、妨害しないように動きを封じますから』

『私、幸せだよお…グス…頼りになる友達が二人もいてくれて…ヒツク…』

『きつと上手くいけますって！ こんなに可愛い人なんですから！』

『いつまでも泣いてたら、可愛い顔が台無しです ほら、笑ってください』

（佐天さん、初春さん、大成功だよっ！！）

アキはあっさりと私を受け入れてくれた。

【案ずるより生むが易し】って諺は、きつとこつという時の為にあるんじゃないかな？

（アキは、私に優しくしてくれる大事にしてくれる…）

それはまだ、恋愛って呼べるものじゃないのは百も承知だ。

アキはまだ、私に恋してる訳じゃない。

妹みたいな感じで可愛がってくれてる事だっただけでわかってる…でも…

(アキの暖かさを失ってなるもんか…!!)

私は、リビングのドアの前で深呼吸を一つ…

(どんな女が出てきても負けないんだからねっ!!)

私は気合い十分にドアを開けた!

でも、リビングにいた一人はとも見知った顔だったけど、もう一人は…

なんていうか、中々に予想の斜め上をいく娘だったわ…(汗)

第3話 "バカと電撃と両力使い"; (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

これで【バカ禁書】のストックは弾切れ、残弾0にございます(____)
^^;;

続きはかなり不定期になります事をご容赦を(____)

いや、実際に第3話までで【この世界の学園都市】の概要説明と、
【現状の明久を取り巻く環境】の説明は、大体終わったかな?と思います(^^;;)

さて、次回からは完全未発表...というか、まだ一文字も書いてない
エピソード(汗)となります。

果たしてどうなることやらと思いますが、もしこの【バカ禁書】を
気に入っていただけたのなら、どうか長い目で見守って頂けると助
かります(;^^)A

それでは、また近い内にお会いできる事を祈りつつ(o^-^)b

ご意見ご感想は、いつでもお待ちしておりますので、どしどしかましくお願
いします（――）

第4話 "バカとプラズマと魔術結社"; (前書き)

皆様、こんにちはー

本日は、【バカ禁書】の脳内画像(笑)が回った暮灘です(^^;

なんか今日は頭が痛いせいか回りが悪いなあ(泣)

さて、今回のエピソードは…

原作だとやたら殺伐としていた一方通行と美琴の会話を可能な限り
柔らかくしてみました(笑)

というか、【この世界の一方通行】って、存外アチコチから”尊敬
”されてるんじゃないだろうか?(^| ^;)

少なくとも”一匹狼”とは程遠いツス(笑)

美琴の”新技フラグ”なんかも立ちながら…

後半は一気に原作と絡んできます。

あつ、ちなみに次回予告風のアレは、上条さんボイスで脳内再生を
お願いします。

いや、【バカ禁書】だと本当に出番が無いんで…(^ ^;

「れ、”れーるがん”？ 個性的なお名前だね？」

「有り得ないしっ！！！」

邂逅する禁書目録と美坂美琴…

「ダアツツツ！ 離れる超電磁砲！」

「い〜じゃん 感謝の気持ちを表してるだけよ」

そして和む（？）美坂美琴と一方通行…

だが、明らかになるインデックスの”追われていた理由”…

彼女の抱える問題はあまりにも大きい…

てゆーか、”ネセサリウス”ってなんだよっ！？

今回、”バカとプラズマと魔術結社”

科学と魔法が融合する街で、世界の闇にうごめく者達が明かされる
！！

第4話 " バカとプラズマと魔術結社" ;

吉井明久の家（学生寮として使われてるマンション。ファミリー向け3LDK）、リビング

「一方、^{いっほう}アンタがここにいるのは凄く納得いくのよ。よくこの部屋でエンカウトするし、アキの親友だし」

「…そりヤドオモ」

口調は素っ気ないが、美琴に【明久の親友と思われるのかよ…】と微妙に内心で嬉しい一方通行である。

ちなみに一方通行、本来の読み方は能力名【アクセラレーター】なのだが、前々から”身内”では「長いっ！」とか「舌噛みそう…」とか不評で、明久が「いっぽー」と呼んでる事をきっかけに、いつの間にか【いっぽー】や【一方】という呼び方が定着してしまったようだ。

「それでこのクッキーを頬張ってるシヨート・スケールのシスターは…その、なんなの…かな？ アキって十字教徒だったっけ？」

「さアな。俺も詳しい事は聞いてねエンだが：明久の話じゃ、布団干そうとしたら、ベランダに引っ掛かってたらしいぜ？」

「へっ？」

美琴は一瞬固まり、演算の末にある答えを導き出した。

「…最近のシスターは、随分と過激かつ凝った演出の布教活動するのねえ」

「その認識、絶対間違ってるからっ！」

と、インデックスは小気味いいツッコミを入れてから、コホンと咳払いして、

「まずは自己紹介からだね？ 私はインデックスっていうんだよ」

すると美琴は自分も座りながら、

「あっ、これはごく丁寧に…私は、」

「コイツは”レベルガン超電磁砲”。俺と同じレベル5の能力者だ」

単にまどろっこしくなったのか、はたまた自分だけ【いっぱい】と何となく可愛らしく呼ばれるのが嫌だったのか、美琴の台詞を奪う一方通行。

「れ、”インデックスねーるがん”…？ 何だか、私の”インデックス禁書目録”と同じぐらい个性的というか…何だか、ハイテク満載の近代兵器みたいな名前だね？（汗）」

インデックスは、対応に困った時にする笑みで、

「えっと…も、もしかして名付け親が、現役の職業軍人さんとかなのかな？」

「有り得ないしっ…！」

今度は律義に美琴からツッコミ返し（笑）

インデックスの気を使うような笑みが、余計にダメージを広げたのはここだけの話。

「一方！ 人の自己紹介勝手に盗んないでよっ…！」

「アン？ まどろっこしいんだよ…つか、オマエの名前って”超電磁砲”じゃねエンだけ？」

「んな訳あるかつっーのっ…！ 私には、”美坂美琴”って立派な名前があんのよっ…！」

何やらヒートアップしそうな二人に、インデックスはアワアワしながら、

「あっ、あのねあのね！ ミコトって可愛い名前なのは分かったからね！ そ、その…ケンカは良くないと思うんだよ？」

明らかに十字教の”七つの大罪”の一つである”大食”を破っているのが、インデックスは一応、建前では汝の隣人を愛して叩かれたら反対の頬を差し出す十字教の敬虔なシスターだ。

”基本的”には、争い好まない。
こういう書き方をしてる以上、これまた十字教徒らしく”応用的”には戦いを問題解決の手段に用いるという意味でもあるのだが…

「別にケンカなんてしてねエぞ？（してないわよ？）」「

「へっ？」

きよとんとするインデックスに、

「いや、俺達のケンカつーと、取り敢えず超電磁砲が電撃飛ばしてくんだろ？」

「それを一方が”反射”で返してきて…」

「んで、超電磁砲がまた再増幅して投げ返してきやがって…」

美琴はプツと吹き出し、

「なんか途中から電撃のドツチボールかテニスのラリーみたいになっちゃうのよ その位になると、怒りなんてどうでもよくなっちゃうって…あつ、一方」

「アン？」

「この間の【電撃ラリー回数新記録】なった時、私の放電で回りの空気が電離して【球電】が発生したじゃない？」

【球電】

大量の雷が発生してる時に稀に出現する、空中を浮遊しながら漂う様々な大きさの発光球体。

自然現象。

現在は、落雷の放電により周囲の大気が電離、プラズマ（電離気体）化して球状に収束した物体：とする説が有力。

一般に高温高圧のガス状球体で、温度の高い物に引き寄せられる性質がある。

また、過去に引き寄せられた球電に直撃されて死亡したケースが複数報告されている。

「ああ。そういや、んな事あったな」

「ありがとう　あれで新技の”パーソナル・リアリティ”が掴めそうよ」

「確か…プラズマ系のエモノ作るとかなんとかって奴か？」

「そうそう！　それぞれ　簡単に言っちゃうと、電磁波で作った細長い筒の中で、内部の空気に電圧をかけて電離させてプラズマを精製、そのまま電磁波の中に封入して武器として使っちゃってアイデア　なんだけど…」

一方通行は、見た目では中々そうとはわからないが、わりと興味ありげに、

「悪くねエンじゃねエか？ 筒状の電磁バリアを形成する前段階で、最初はこう…可能な限り電磁波を網みてエにして放射状に広げんだる？ ンで、周囲の空気を吸着しながら…」

一方通行は自分の手の平を広げ、それを美琴の前でギュッと握り、

「その電磁網を圧縮するイメージで細長エ筒を形成すりゃ、内部はデフォで【高圧帯電した圧縮空気】なんだろ？ そうすりゃ、ちょっと電圧かけりゃ電離して、内部がプラズマ化しやすいンじゃね？」

美琴は一瞬、”目から鱗”という表現のままに唾然とすると、何かを考え込みブツブツ呟いた後、

「一方、ありがと、一方のお陰で、更にパーソナル・リアリティがイメージしやすくなったわ。」

”ぎゅ〜っ”

と、思わず一方通行に抱き付く美琴。

どうやら一方通行、不用意に傷つけたり部屋にダメージを与えないように、”反射”は切ってたらしい。

存外、見えないところで気を使う一方通行であった。

「ダアツツツ！ 離れる超電磁砲！ ウゼエよ！」

「い〜じゃん ちよっと感謝の気持ちを表してるだけよ。」

なんのかんの言いながら、美琴を”反射”で弾き飛ばさないあたり、一方通行にしても満更ではないのだろう。多分だが。

「【電磁封入プラズマ】を使いこなせるようになったら、取り敢えず剣状の”ブレード”、投擲鎗の”ランサー”、あと射撃武器としても使いたいわね」

「そんなときゃ、”電離^{プラズマ}投射砲”って呼んでやっから、いい加減に離れるッ！」

二人の会話の意味はよくわからなかったが、インデックスは見たままに、

「ねえ…もしかして、いっぽーとミコトって仲良しなのかな？」

「へっ？ 私は悪くないんじゃないかなあ〜って思ってるけど？ 能力者としては尊敬もしてるし…ねえ？ 一方的にはどうなの？」

「…知らねエよ」

と、一方通行は視線を無邪気に自分を見る美琴から逸らして、白髪をくしゃりと搔く。

そう、照れた時の一方通行の仕草だ。

明久が新しいお茶と美琴の持ってきたケーキをトレーに乗せてやって来たのは、ちょうどその騒ぎの後くらいだった。

「わあ〜い ケーキだあ」

と、明久がトレーを置くなり、神速で”二つしかないケーキ”の一つを強奪するインデックス（汗）

「あつ！ ちょっと！ それアキの為に買ってきた…」

「まあまあ、ミコちゃん」

と、宥める明久だったが…

「でもお…」

今にも涙ぐみそうな美琴の頭を明久は子供をあやすようにそつと撫でて、

「じゃあ、こつしよっか？ 今度、ミコちゃんがそのお店に招待してくれるかな？ その時は、僕がケーキをおごるから ねっ？」

そう明久が言うなり、美琴は”にぱあ”と笑い、

「う、うん」

(やったあっ！ デートの口実、ゲットおーっ！！ 暴飲暴食シスター、グツジョブ！！)

まさに”災い転じて…”を地で行く美琴である(笑)

さて、インデックスが世にも幸せそうな顔でケーキを完食するのを待ってから…

「ところでインデックス…どうして、君が僕の家ベランダに引っ掛かってたか、そろそろ聞いていい？」

インデックスは、お代わりの紅茶を飲みながらコクンと頷き、

「目測を誤って落ちたんだよ…本当は、屋上から屋上に跳び移るつもりだったんだけどね」

その言葉を聞いて、明久、一方通行、美琴の三人は首を捻り、

「ここ八階だけど…？」

「仕方が無かったんだよ。追われてたからね…」

「追われてたって…誰に？」

「“魔術結社”だよ」

インデックスの言葉に再び困惑気味に顔を見合わせる三人…

だが、インデックスはそのリアクションに困惑して、

「あれ？ 日本語がおかしかったかな？ 魔術結社…”マジック・キャバル”だよ」

すると一方通行は、

「いや、日本語はおかしかねエンだが…」

「状況がおかしいのよねえ…」

と、一方通行の言葉を美琴が繋いだ。

「? どういう意味?」

不思議そうな顔をするインデックスに、明久は、

「いいインデックス、よく聞いて? 超能力開発が先行してたから、そっちばかりが着目される事が多いけど…約20年前のシエリー・クロムウエル教授とエリス・マツカートニー教授の【魔術/能力相互使用実験】以来、【学園都市】は”極東最大の魔術師拠点”って側面もあるんだ」

明久の言葉に美琴は頷いて、

「現在の学園都市の人口は480万人…その中で100万人超の”魔術師”や”バイア(両力使い)”がいて、人口の約半分が何らかの形で魔法や魔術に関わってるって言われてるの」

「しかも、学園都市は英国十字清教と同盟締結してんだぜ? それも、軍事同盟を視野に入れた強力なヤツをな」

「だからさ、学園都市には十字清教会や魔術協会関連の施設が密集してる場所…【石を投げれば、魔術師か聖職者に当たる】って地区が幾つも点在してるんだ」

「そんな街で、”ジャツジメント”はともかく、【カウンター・マジカ(対違法魔術師部隊:アンチ・スキルの対魔術版)】の監視網をすり抜けて悪さできる”モグリの魔術結社”ってちょっと想像出来ないのよ…」

と、美琴は考え込んだ。

「一番、破壊工作やりそうなのは、”ローマ”の特殊工作員とかだけど…」

明久の言葉に、一方通行は首を横に振り、

「いや。こんなに派手にはやらねエだ口オな…学園都市とモメるだけならまだしも、問題拗れりゃ英国十字清教とも全面対決だ。いくらなんでも、【欧州大戦、再び】ってのは望まねエサ」

「その理屈で言うと、直ぐに潰されるような弱者魔術結社は、余計に迂濶な真似はしないだろうし…」

美琴の台詞に明久は頷きながら、

「まあ、英国十字清教…正解には【必要悪の教会】ネセサリウスに好んでケンカうる魔術師は、そうそういないだろうね。魔術師狩りに特化した彼らと戦うのは、リスク高過ぎるもんね」

しかし、明久の何気無い一言に過剰なまでに反応したのは、

「アキヒサ!”ネセサリウス”を知ってるのっ!?”

その食付きの激しさに、明久は少し驚きながら、

「う、うん。直接的な知り合いはいないけど、概要ぐらいはね。—

応、僕もミコちゃんも【暗部】に関わりのある人間だし…：いっばーは」

「俺はバリバリ暗部だ」

と、事も無げにサラッと言う一方通行。

どうやら、【この世界】の彼は、”グループ”の一員として動いてるらしい。

ただ、まだメンバーは土御門と一方通行、シヨタコンの”座標移動”ムーブ・ポイント使いと、サポート（一方通行曰く「勝手について来んだヨ」）の妹分二人+”半ズボンの似合いそうな少年達（笑）」らしいが…

いや、それはさておき…

「私も”ネセサリウス”なんだよ…」

インデックスは、真剣な眼差しで、

「正解には、私は【第零聖堂区】ネセサリウス必要悪の教会”【所属の”魔導書図書館”…」

明久を少しだけ哀しそうに見て、

「それが、私の”正体”なんだよ…」

明かされる【禁書目録】の正体：

いよいよ、物語は核心に向かいつつあった！！

第4話 " バカとプラズマと魔術結社"; (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございますm()m

ほのぼの系の一方と美琴は如何だったでしょうか？(^^;)

実は後半は原作とからめつつ、【この世界の変更点】がかなり記してあったりして(^^;)

しかも、微妙に淡希の登場フラグが…(笑)

実は”グループ”はかなり前から活動してるみたいで、明久もたまにグループ絡みの仕事でサポートに入ったりしてます。

美琴は組織には所属してませんが…

まあ、レベル5は多かれ少なかれ、何かと学園都市の治安維持活動に従事してるって事で(^^;)

さて、インデックスの正体も出てきたし、ようやく原作風に動き出すかな〜と思っています(^^;)

それでは、またお会いできる事を祈りつつ()

第5話 "バカと定義と錬金術"; (前書き)

皆様、こんにちはー

禁書板にお引越しして、初めての投稿にドキドキの暮灘です)

^^;

あと、実はこのエピソードは2回目に送信した文章です。
つまり…

またメール投稿できなくなってたんですよ!!
フザケんな運営!!

また、運営は誠意の欠片もない愚にもつかない説明を繰り返すんですかね？

さてさて、今回のエピソードは…

明久、一方通行、美琴【バカ禁書】世界の能力/魔術/錬金術の独自解釈と定義、設定のオンパレードです(^^);

実は、【バカ禁書】が原作の禁書目録との”決定的”な差が色々と書かれています(^^;))

最初は設定資料でも作るうかと思いましたが、いやそれじゃあ読める読者様もややこしい上に面白くないだろうって事で、エピソードとして仕上げてみました(o^-^)(b

では、恒例の次回予告風のアレを…

「私は、10万3000冊の魔導書を所蔵する図書館なんだよ…」

自らの秘密の一旦を語るインデックス！

そして、明久は魔法と科学…そして、

「錬金術は科学サイドから見ると量子レベルの情報操作なんだよ」
錬金術の謎が明らかになる！

ヤバイ…上条さんの頭はオーバーヒート気味だっ！

今回、第5話【バカと定義と錬金術】！

科学と魔法が融合する街で、シェリーとエリスの20年の成果が明かされる…

第5話 " バカと定義と錬金術" ;

「私は【第零聖堂区】^{ネセサリウス}必要悪の教会”【所属の”魔導書図書館”…」

インデックスの口から明かされたのは、彼女の”本質”であり、

「それが、私の”正体”なんだよ…」

「【必要悪の教会の^{ネセサリウス}”魔導書図書館”】？ インデックスが？」

インデックスはコクンと頷き、

「さっき（第1話）、明久が言った【Index Librorum Prohibitorum】って言うのは、私の正式な名前なの。この世界に有毒な魔導書…【^{タブー}禁忌の書”】を集めてあるから、私は【禁書目録】なんだよ」

本来の意味での【禁書目録】…【Index Librorum Prohibitorum】は、1564年にローマ十字正教の教皇によって制定されて、1966年に廃止されるまで存在してい

たらしい【反十字教的な内容の書物をリストアップした目録】…つまり、” 宗教的発禁本のブラックリスト” だ。

「まあ、意味はわかンぜ。ネーミング・センスは最悪だがな」

あまり面白くなさそうに言う一方通行に、美琴は苦笑しながら、

「英国らしいブラック・ユーモアと言えばそれまでだけどね」

「ねえ、インデックス…君は自分を” 魔導書図書館” だって言ったよね？ もしかして、インデックスが追われてる理由ってそれに関係してる」

インデックスは、再び頷くと、

「うん。多分、私が” 所属” してる【10万3000冊の魔導書】が狙い何だと思っただよ」

「10万3千冊の魔導書だア？　ンなもん、どこに…もしかしてシスター、【量子転換】クオンタム・シフトして持ち歩いてンのか？」

「くおんたむ・しふと…？　いつぱー、それってどんな魔法なのかな？」

「図上にいくつかの？」　マークを浮かべるインデックスだったが、

「いや、そりやないつしょ？　10万冊以上の魔導書を常に量子化して身体の周囲に格納、任意の時に物質化できるんだとしたら…質量や情報量から逆算したら、とんでもない【恒常演算】サブコンシャス・プロセスシング量よ？　それって、アンタの”反射”より確実に上なんだけど…一方より演算能力が上回る魔術側の人間って、ちよっと思ひ浮かばないんだけど？」

【恒常演算】とは？
サブコンシャス・プロセスシング

簡単に言えば、能力者が無自覚&無意識に行なっている脳内演算処理の事。

この演算能力が高いと《常時、能力を発動してる状態》となり、一方通行の”反射”や絹旗最愛の【窒素装甲】オフエンス・アーマーがそれに該当する。

「ンだな。それに【量子】アルケミストの転換だの分解だの再構築じみた力は、どちらかといやア”錬金術師”共の領分か…」

「だね。【世界を量子レベルで解析し、自在に数値を変動させ思のままに再構築する】のが錬金術の基本だからね」

「便利は便利な力よね。私も簡単なのでいいから”錬金術”をマスターしてみようかな…」

一方通行／明久／美琴の言葉に、インデックスは目をパチクリさせて、

「えっと…私の知ってる錬金術の解釈と、大分違つかも？」

すると三人は苦笑して、

「そりゃそうだよ。インデックス、今は【科学サイドからの錬金術の解釈】だからね」

と、明久。

「アレだろ？ オマエが知ってる錬金術ってのは、『世界の構造を理解し、世界を自由に作り変える』みてエな概念と、具体的な方法とかだろ？」

「大体、当たり前なんだよ」

「でも、科学サイドから見ると、錬金術の概念って、もっと深いところまで進んでるのよね。これが」

「深いところ？」

「うーん…これは少し【魔術と能力の近似性】の講義をした方が、遠回りに見えて早いかな？」

「インデックス、”能力”に対する知識って、どのくらいある？」

「大雑把な知識ぐらいだよ。能力に関する書物は、少ししか読んだことないし…」

明久は少し考え、

「じゃあ、脳内演算と術式って【方法論の違い】だけで、生体エネルギー…魔術で言う《マナ（人間の根源的存在エネルギー）》を触媒に物理事象に干渉し、法則を可変させるって【本質】は変わらない…って理論は、知ってる？」

「ほえ？」

まるで知らない国の言葉を聞いたようにキョトンとするインデック

スに、

「俺達”能力者”は、まず”パーソナル・リアリティ”ありきた。そして”演算”。簡単に言っちゃえば、【物理法則をパーソナル・リアリティ通りにするには、どう干渉すりゃいいのか?】って演算すんだ」

一方通行の解説を今度は美琴が受け継ぎ、

「魔術的な解釈で言うなら、いくつもの術式を脳内で練り上げるよ
うな物よ。そして、出来上がった”解”を生体エネルギーを触媒に
して放出。そうやって空間に干渉をかけるの」

「だから、大きな”能力”を發揮しようとしたら、大きな力をイメ
ージしつつ、より精密なパーソナル・リアリティを練り上げ、それ
に見合った脳内演算処理能力が必要になってくるんだ。パーソナル・
イメージだけあっても演算能力が足りなければ、空間干渉は出来な
いからね」

するとインデックスは納得したように、

「あつ、その脳内複数並列の術式…ぱーそなる・りありてい?と演
算能力のバランスが取れた所が、【能力者のレベル】なんだね?
”能力”っていうのは、【脳内演算処理能力】の事なんだね?」

明久はニッコリ微笑み、

「こ名答だよ　じゃあ、次は【科学サイドからの魔法の解釈】は

想像がつく?」

「ん〜と…」能力”…【脳外で発動するぱーそなる・りありていとかな?」

思わず”ヒュ〜ッ”と口笛を吹いたのは一方通行だった。

「こいつア、驚いたぜ。殆ど正解じゃねエか」

「えっ? そなの?」

美琴も感心したように、

「インデックスって凄く優秀なのね〜 えーとね…要約すると、科学サイドの解釈だと魔術って【テンプレート化された”ジェネラル・パーパス・リアリティ（GPRリアリティ：汎用現実感）】なのよ」

「えっと…もう少し噛み砕いてくれると嬉しいかも…」

コンピュータ用語にはイマイチ弱いインデックスに明久は、

「そつだなあ…一つの事象、例えば”電撃を出す”って能力の場合、発電能力者なら誰でもできるけど…」

美琴を見ながら明久は、

「でも、パーソナル・リアリティは言葉通り”固有現実感”だから、

ミコちゃんの電撃はミコちゃんにしか出せない。他の発電能力者は、微妙に違うんだよ。でも、”電撃を出す”って何人ものパーソナル・リアリティの中で必ず共通項と共通する演算がある筈なんだ」

「ソイツから可能な限り【固有イメージを削ぎ落とし】、共通項を抽出しと図式化や図案化…絵でも模様でも文字でも、あるいは音声…まア、呪文だな。パーソナル・リアリティや脳内演算に頼らねエで、生体エネルギーがありやある程度は誰でも使えるように【術式化】…俺達で言うテンプレート化したもんが【魔術】なのさ」

「そっかあ…科学サイドってそういう風に魔術を解釈してるんだね」
「…」

感心しながら少し唾然としたようなインデックス…

「まあ、他にも色々見解は有るんだけど…」能力”は単一指向性で

多様性はないけど応用は高いとか、”魔術”は多様性は有るけど一術式一効果だから応用は効かないとかね」

そして、明久の台詞を美琴はこう補足する。

「例えば、”雷落とし（サンダーフォール）”って術式あるわよね？」

「う、うん」

「だけど、私は魔術風に言つと”雷落とし”の術式を頭の中でアレンジして、”雷鎗”^{サンダーランス}や”電撃防壁”^{サンダーウォール}を作ったりできるの。どれも、私の発電能力に加えて周囲の大气の中にある静電気を集めて”巨大な帯電を作る”って行為は同じだからね」

「雷って属性の魔術なら術式変えずになんでもござれなんて…”能力”って相当便利な力なんだね」

素直に驚くインデックスに、

「ところが、”能力”っていうのはちゃんとレベル以外にも限界が存在しててね…さっきアキが言ってたけど、多様性は無いの。例えば、私はレベル5の発電能力者だけど、落雷で火は付けられても、ライター代わりにしかならないようなレベル1発火能力者の炎すら出せないのよ」

「ま、それにアレだな」

一方通行は、面白くない冗談でも言い出しそうな表情で、

「能力者には魔術師最大の目玉、”偶像崇拜の理論”が使えねエのさ。宗教的意味：信仰に裏打ちされた力ってのは、扱うのが苦手なんだ」

「えっ？ 演算の中に取り込めないの？」

「神様に天使に悪魔：纏めて”高位存在”としちゃうけど、その高位存在が三次元世界にいと仮定して、その力を行使するのが偶像崇拜の理論でしょ？」

明久は一呼吸置いて、

「それは平たく言えば偶像って言うのは、【イメージにしか存在しない数値化不可能な物】なんだ。数値化できないなら演算のしようがない：これが、”能力”じゃ偶像の力を再現できない理由なんだ」

「イメージだけで術式構築できるのって、本当に”魔術の強み”だと思っわよ」

と、楽しげな口調の美琴だった。

「さて、いよいよ錬金術だけど…ここまでで分からないところ、あった？」

明久が聞くとインデックスは首を小さく左右に振る。

「まずは、【錬金術】は魔法と科学、魔術と能力の”中間の学問”ってというのは、魔術師も同じ認識だと思うけど…いい？」

「うん」

「まず、科学サイドは【錬金術から魔術的要素を抜き、誰でも使える汎用性のみを残したのが、”現代科学”】だって定義してるんだ。実際、”我々の世界”でもかつて錬金術師達が薬品を混ぜ合わせた結果が化学の雛形になっていたり、溶解させた金属を混ぜ合わせた固めたのが、合金や冶金技術の礎になっていたりするのだ。」

「インデックス、この世の物質って言うのは、全て陽子、中性子、電子からなる”原子”から構成されてる…長い間、原子が物質の最小単位だったけど…」

「でも、原子を構成する最小の要素、電子よりも更に”小さな粒子”が発見されたの。正確には電子ですら、その”小さな粒”の集合体なんじゃないかってっね」

「それが”^{クォンタム}量子”だな」

美琴と一方通行の言葉に明久は頷き、

「そうだよ。【科学サイドの錬金術の解釈】は、【自分の認知できる範囲を量子レベルの粒の集合】と捉えて、それを観測/計測/解析して【生体エネルギーを触媒に、場の量子集合情報を任意に書き換える】事で術を発動させるって定義なんだよ」

「人間って本当に立ち位置によって見える物が違ってくるんだねえ…」

インデックスは、半ば呆れ半ば感動すらするように言うと、

「それに【学園都市】って、本当に魔術や錬金術まで何でも研究してるってというのが、アキヒサ達の言葉からもよくわかったんだよ…なら…」

インデックスは三人を真っ直ぐに見ると、

「なら、私の持つてる”10万3000冊の意味も分かる…よね？」

第5話 "ハカと定義と錬金術"; (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

実は、この先に何度も出てくる魔法と科学の関わりと、【魔術と能力の近似と相違】を一度ちゃんと纏めて起きたいな〜と考えてたら、こんなエピソードが出来てました(^^);

【科学サイドからの魔術の解釈】と、【科学サイドからの錬金術の解釈】って、一度ちゃんと書いておきたかったんですよ〜

殆どが説明だった今回のエピソードですが、ご意見ご感想ツッコミ等々を、首を長くしてお待ちしております(____)

それでは皆様、またお会いできる事を祈りつつ(____)

第6話 " バカと猫とグリモワール"; (前書き)

皆様、こんばんわー

本日、全く筆が乗らず、仕上げるのに普段の倍の時間がかかった暮
灘です (^ ^ ;

スランプの前兆じゃないといいなあ… (汗)

さて、今回のエピソードは…

前はガチで全編、能力と魔術と錬金術を書いたので、

「このままじゃあ、いかん！」

と暮灘の萌える魂(笑)が叫んだので、前半は【萌え 美琴】をお
楽しみください

ちなみに、いっぽーさんの私生活も少し出てきます。

書いてる作者が言うのもなんですが…

いっぽーさん、ブレなく漢だぜっ!!!(o^_^)(b

後半は微かにシリアス臭が…

ラストに明久が、”とある決断”をします。

赤毛の最強（笑）よ…

君に、主の加護が大量にあらんことを…

取り敢えずこんな感じのエピソードですが、楽しんで戴ければ幸いです（o^_^）b

第6話 "ハカと猫とグリモワール";

「【学園都市】って、本当に魔術や錬金術まで何でも研究してるってというのが、アキヒサ達の言葉からもよくわかったんだよ…なら…」

インデックスは吉井明久、御坂美琴、一方通行を真っ直ぐに見ると、
「なら、私の持つてる”10万3000冊の意味も分かる…よね？」

「いや…その意味は嫌って程分かるンだけだよオ…解せねエのは、学園都市の【十字清教】系の魔術結社の動きだぜ。シスターの言う事が正しいとすりゃ…」

「ねえ…それって、もしかして…」

元々頭の回転が早い上に、少なからず”暗部”…内外様々な敵対勢力と日々抗争を繰り返す【学園の裏の治安組織】と、少なからず関わりがある美琴だ。

何となく一方通行が言わんとする事を察したようだ。

「ミロちゃん…まだ、憶測の段階だよ？」

美琴が決定的な一言を発してしまう前に明久はそうたしなめる。

「そ、そうね…」

と、少しバツが悪そうな美琴だったが、明久は頭を優しく撫でて、

「分かればよろしい」

「ふみい〜…」

何か仔猫っぽく目を細める美琴…

そんな安心しきった美琴の顔を、インデックスは少し羨ましそうに見ていた…

「ミロちゃん、おいで」

「みゃん」

胡座をかいた明久の膝に、コテンと横になり嬉しそうに頭をチヨコンと乗つける美琴。

「んみゃ〜　ゴロゴロ〜」

世にも幸せそうに猫の鳴き真似をする美琴だったが、ただでさえ短い常磐台の制服のスカートでそんな格好をすれば、捲れあがって中が丸見えだ。

しかも、今の美琴は明久を好きだと自覚した瞬間から短パンを脱ぎ捨てた存在…

つまり、スカートの中身は、薄い青と白のストライプの小さな三角形の布地だけということだ。

ぶつちやけ、一方通行どころか明久の位置からもガン見えだ。

しかし、一方通行に動じた気配はない。

なんせ、妹分二人で見慣れてるのだ。

ニットの超ミニワンピースを好む絹旗は、外では「見えないギリギリのライン」と言い張ってるが、一方通行の前ではモロパン上等、おっぴろげ当たり前

片や黑夜もあのへソまで届かないブラの親戚みたいなタンクトップ

一枚にパンツ一枚という格好で家の中をウロウロしてたりする。

そして、一方通行とてバカでは無いので、妹二人が1年365日24時間体制で誘ってるのは、百も承知。

ムラツとくれば、脱がすかずらすかして、二つの意味（場所&部位）で所構わず即インサートだ。

というか、それだけあからさまに誘って一方通行の反応が無ければ、絹旗&黒夜の二人とも、女の子としてのプライドがイマジン・ブレイク（笑）され、精神的な意味で暗部に落ちていただろう。

蛇足ながら、二人とも上も後も後ろも既に使用済みの開発済み、ついでに一方通行が医学書片手に編み出した【特殊な体内物質のベクトル操作】で、出会った頃と殆ど容姿が変わっていない…というか、ちっこいままだ。

どうやら、ある意味とても健全で生活面も性活面も色々充実して
るらしい一方一家(?)だが、他方明久はと言えば…

「ミコちゃんは、本当に可愛いなあ」

「にゃん」

明久に撫でられる度に、

”ジワッ…”

ストライプの布地が湿り気を帯び、美琴から溢れた体液が少しずつ
染みを広げていた…

「ミコちゃん、もうこんなにはんつ濡らしちゃったの？」

「にゃん…」

『恥ずかしい娘で。ごめんなさい』と言いたげな美琴の髪を明久は
無垢の微笑みのまま撫でる強さを少しだけ強くして、

「イケない猫ちゃんだね 後でお着替えさせてあげないとね」

「にゃん」

と、美琴は嬉しそうに鳴いた。

明久は、ある部分においては異常なのかもしれない。

これが、まだ性的な意味での”ペットごっこ”だったら、まだ理解もできよう。

だが、明久は”本気”で 美琴を愛でていた。

美琴の全てが…恥ずかしい液体を直ぐに滴らせてしまう、そんな性的な部分まで含めて理解しながらも、少なくとも表面上は愛しいではなく、愛らしいと思っ**て**いるようだった…

そして、輪をかけて喜劇的なのは、美琴が明久の

【容赦無い慈愛】

をあっさり受け入れ、**肢体**も**精神**も**馴染**んでしまっているところだ。

『明久に熱愛中』を自認する美琴にとって、本来ならこの扱いは不本意な物かもしれない。

寮の部屋でふと冷静になった時、

『好きな男の前で猫真似&恥ずかしい汁垂れ流しなんて、しかも拭いてもらってる最中にイッた挙げ句、パンツ履き替えさせて貰うなんてえ〜っ!!!／／／』

と、ベッドで一人身悶えする羽目になるかもしれないが…

でも、”今の美琴”にとってそれはどうでもいい話だ。

そして、冷静になったところで、もう後戻りできないくらい…自我がおかしくなるほど、自分が明久に溺れてる事を自覚するだけだ。

ある意味、美琴は”壊れ”ているのだろう。

ただし、狂気とかの類いではなく…

強いて言語化するなら、【蕩^{とろ}けて】いた。

表情も肢体も心も魂も、明久から伝わる甘く暖かい”何か”により包まれ、緩みきってフニャフニャになっていた…

きっとそれは普通の意味での恋愛感情とは、また違う物なのだろう。

だが、ハッキリしてるのは、美琴がそこにどうしようもない…どうにもならないぐらい、居心地の良さを感じてるといふ事だ。

愛情込みで、強い快樂やハードな調教だけが人を壊す訳じゃない。

甘さも時には、ゆっくり浸透してくる毒薬のように人を壊す事は、
ままある。

甘さに慣れた人間は、もつと甘さが欲しくなる…
甘えたくなる…

甘さが無くなると考えただけで恐怖する…

人はそのような状態をなんと呼ぶかと言えば、【依存症】と言う。

美琴が【明久依存症】かどうかは、読者の皆様の判断に任せるとし
よう。

「あのねアキヒサ、ミコト…その姿を人前で見せるのは、私もどう
かなって思うんだよ…」

と、細やかな抗議を顔を真っ赤にしながら行なったのは、言うまで
もなくインデックスだ。

「ん…でも私、アキの飼い猫だし。野良猫だった私を拾ってくれ

たの、アキだったしなあ〜」

明久はクスクス笑いながら、

「そうだったね〜 出会った頃のミコちゃんは、いつも何かに苛立ってて、他人を寄せ付けないようにピリピリしてて、ケンカっ早くて…確かにノラ猫っぽかったかな？」

「ムウ〜…アキ、言い過ぎ！ 否定しきれないところが悔しいけど…」

「明久、そろそろ話進めンぞ」

タイミングを見計らうようにそう切り出したのは、一方通行だ。

いや、実際にタイミングを測っていたのだろう。

明久の性格や行動パターンを考えれば、意味も脈絡もなく美琴を愛で出すとは考えにくい…

(まあ、超電磁砲は経験が足りねエからな…)

暗部でも”深度”がある。

レベル5で暗部に関わりのない能力者はほばいないだろうが、美琴がいるのは”今のところ”まだ比較的浅い方だ。

だから、彼女は不用意な発言を仕掛けた。

明久は本能的に、【例え口を挟むなどという意味に気付いたとしても、美琴が喜んで納得する】方法をとったに過ぎない。

考えようによっては卑怯な遣り口かもしれないが、円滑な情報獲得の為には全ての手段は正当化されるべきと一方通行は考えていた。

そう、一方通行も明久も気付いていた。

この問題が想像以上に根深く、またデリケートになる可能性が出てきた事に、だ。

「インデックス、量子転換でも錬金術師でもないなら、【10万3000冊の魔導書】が入ってるのは…もしかして、ここかな？」

美琴が膝で気持ち良さそうにゴロゴロ喉を鳴らしてる中、明久は自

分のコマカミを人差し指でちょんちょんと指した。

「うん、正解。魔導書は私の頭の中…私には【絶対記憶】^{アブソリュート・メモリー}があるから、10万3000冊の読んだ内容を全て記憶してるんだよ」

頷くインデックスに、

「状況は大体掴めたよ…インデックス、もしかして君は魔術を使えない、もしくは余り使えないじゃない？」

インデックスは素直に驚いた顔で、

「アキヒサ、なんで判ったのっ！？もしかして、【魔術探知】^{マジカ・サーチ}とか使えるの…？」

「ううん。残念ながらそっちはからつきし。ただの推理だよ」

「推理？」

首を捻るインデックスに一方通行は、

「魔導書ツてのは、”原典”が一番強力てのが相場だが…【力ある魔導書】ってのは、その書かれてる情報を読むだけで【魔力中毒症】を引き起こすからなア」

一方通行の言葉に明久は頷き、

「【グリモワール（広義の魔導書。奥義書という意味もある）】で有名どころだと…《ソロモンの鍵》に《レメゲトン》、《アル・アシフ》にその写本の《ネクロノミコン（死者の書）》、《ナコト写

本』に《エイボンの書》辺りかな？」

「…それ、全部私覚えてるんだよ」

「なら、余計に推理は簡単だよ？ それら《毒性の強い魔導書》を記憶してるなら、【インデックスの内側】に強力な【ディスプレイ・カウンター・マジック（解呪抗魔力防壁魔術）】かなんかを展開するしかないからね。おそらく、それに殆どの魔力を取られてるんじゃないかな？」

「オマエ、記憶を失う前…いや、【魔導書図書館】になる前は、かなりの魔術師だったと思うぜ？ そんなだけの魔導書を抑え込む術式なんざア、俺だって見たことも聞いた事もねエ」

「しかし、どうするよ？ 【魔導書図書館】に目が眩んだ大ボケ田舎結社だったら問題ねエンだが…」

「そうだね…だけど、【他の可能性】も考えておこう…でもさ、
明久は真っ直ぐに一方通行を見ると、

「仮にも【裏の治安】を預かる僕達に、一切報告が来てないってのは気に入らないな…」

（上層部や十字清教、魔術協会…いや、”ネセサリウス”が何を考
えてるか知らないけどさ…）

「インデックス、君を追いかけてる魔術師の人数は何人で、どんな
感じ？」

インデックスは少し考えて…思い出すというより言葉を纏めてるよ
うで、

「えっと…人数は二人だよ？ 一人は長い黒髪をポニーテールにし
た長身の東洋人の女性で、片方が太ももから無いダメージ・ジーン
ズに胸のすぐ下で縛った白いTシャツ、ブーツとベルトはウエスタ
ンっぽくて、私の身長より長い片刃の大太刀を下げてるよ。もう一
人は身長2mは有りそうな大男で、肩に届きそうな赤毛。右目の下
にバー状のルーンが入ってて手の全部の指にリングをしてて、耳に
もリング・ピアスが10個。服装は真っ暗な修道服と一体化した同
色のマント。見た目はコートに見えると思う」

「特徴有りすぎじゃねエか…」

チツと舌を打ち鳴らす一方通行…

これだけの身体的&服装的な特徴がある二人が、十字清教や魔術協
会の探索網から逃れられるとは思えない…

(面倒な方が当たり臭エな…)

戦力としてじゃない。

組織間のパワー・バランスだの政治的要因だのが出てきそうな話と
いう意味でだ。

「いっぽー」

明久は不敵に笑い、

「僕達に届け出がない未確認アンノウン・マギカ魔術師が、ネセサリウスの小さなシス
ターを追い掛け回してる…分かってるのはこれだけで、幸か不幸か
”上”からは何の命令も来ていない…」

明久は一呼吸置くと、

「なら、”普通”に対応しようよ？ どの魔術師なのかは知らな
いけど…」

明久は不敵な笑みに獰猛さを微かに滲ませ、

「学園都市暗部名物、【カウンター・マギカ・タクティクス(対魔
術師戦術)】で、丁寧に迎えてあげようじゃない…!!」

第6話 " バカと猫とグリモワール"; (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(_____)m

前半は文字通り明久が美琴を【猫っ可愛がり(笑)】するパート、後半は全面衝突(?) フラグパートでしたが、如何だったでしょうか?

いや、フニヤフニヤにゃ〜ん な【骨抜き美琴】が書いてて楽しい
楽しい(笑)

そして、【明久もやっぱり暗部の一部なんだあ〜】的なニュアンス
が出せれば勝ちかなと(; ^ | ^ A

114

今回はいよいよ赤毛の神父が出てくるかな…?

というか、対いっぽー戦でいきなり「Bye-byeきーん」と
かになんなきゃ良いけど(笑)

いつアップとお約束できないのが辛いところですが、またお会いでき
る事を祈りつつ(o^_^)(b

ご意見ご感想は、作者の執筆栄養源

いつでもお待ちしております（――）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3936y/>

とあるバカと禁書目録

2011年11月17日09時19分発行